

## 「自己」元型像としての Pearl

— 元型の対立と統合 —

高 島 まり子

### 序

既にこれまで、エリッヒ・ノイマンの説を援用して、『緋文字』を男性の自我意識の発達過程を元型的に描いた一種の英雄神話と位置付け、主要な登場人物の役割、彼らの相互関係や状況、そして作品を生みだすに至った作者ホーソーンの私的要因と社会的要因の考察等を通して、作品の意味を考えてきた。その結果、作者の私的な状況や当時のアメリカの社会的背景が、作品といかに密接な関係を持っているか、また公私にわたる外界の状況とその推移に対する作者の受け止め方が、作品の元型的な英雄神話としてのプロットの展開と驚くほどパラレルを成していることが、明らかになった。拙論「英雄神話『緋文字』の意味」<sup>1</sup>において考察したように、作者は、『緋文字』執筆に至るまでの時期に、私的にも父元型と母元型の引力に挟まれた「原両親の分離」から自我の独立を達成する「竜との戦い」への途上にあったと思われる。即ち、父方のピューリタンの祖先のイメージと現実の母方の叔父ロバートという「恐ろしい父」に、意に添わない形で男性性を強要されると同時に、作家としてのアイデンティティの実現を阻止され、その一方で母親へのエディプス的な依存、姉妹との近親相姦的な感情、母方の祖先の近親相姦の罪などに象徴される暗い情念という「恐ろしい母」に、引きつけられながらも男性としての自立を脅かされてきたのである。彼を救ったのは、昔の税関検査官ピュー氏に象徴される文学的価値観という肯定的な父性原理、そして文学世界への先導者としての姉エリザベスと協力者にして愛する妻であるソフィアの二人に代表される肯定的な女性（母性）原理であったと考えられる。彼は、少年期から青年期にかけては姉に先導されて、祖先による想像上の圧力と叔父による現実の妨害という「恐ろしい父」を乗り越えて作家としての道を歩み始め、ソフィアとの結婚によって「恐ろしい母」の否定的な支配力に対抗し、結婚後は妻に援助されて遂にロゴスの世界の父親像に直結して作品『緋文字』を書くに至り、それによって「恐ろしい母」と「恐ろしい父」を共に克服し、作家として、また男性としての自立を果たしたのであると言えよう。その経緯は、『緋文字』において未熟な自我を象徴するデイズデイルが、父なる「共同体」と母なるヘスターという二つの巨大な対立項の真ん中に立ちつくす場面から始まって、古い体制の後継者としての歪んだペルソナを押しつけようとする「共同体」と、人知れず彼の魂を支配しようとするチリングワスによって表わされる二種類の「恐ろしい父」と、「太母」ヘスターの奔放な性的情念や新思想（アン・ハッチンソンの社会改革、フェミニズム、超絶主義的な人生観）によって表わされる「恐ろしい母」の支配力に引き裂かれ、圧倒されながらも、ヘスターの女性としての成長プロセスに先導され、彼女のパールへの母性愛、「慈悲の修道女」としての活動、告白の際の聖母イメージ等で表わされる肯定的な女性原理に支えられ、悪魔から父なる神の使者へと反転したチリングワスの

逆説的な力に刺激されて、ピューリタン神という肯定的な父性原理に真の意味で帰依することによって告白を實行し、最終的な独立を果たしたプロセスと非常によく似ている。いずれの場合も、ノイマンの言う自我発達の過程において「原両親の分離」から「竜との戦い」へと向かう「息子=自我」を中心に、まず二つの元型が対立し、それが四つの力に分解した後、徐々に最終的な統合に向かうという構図が浮かび上がってくる。四つの力とは、「息子=自我」の独立を阻止しようとする「原父」の否定面（「恐ろしい父」）と「原母」の否定面（「恐ろしい母」）、逆に彼の独立を助けようとする「原父」と「原母」各々の肯定面である。

また前述の拙論でも述べたように、『緋文字』が執筆された当時の19世紀前半のアメリカ社会においてもこのような元型的な布置が見られることを、作者は意識していたと考えられるのである。未来に向かって前進を続ける若きアメリカにも、父なる文化と母なる自然からの相反する引力が働いていた。彼を支配しようとしていた「恐ろしい父」として、ホーソーンが批判した圧倒的な力とは、ピューリタニズムに基く「庭園の神話」に支えられた父権的な国家主義、そしてそれを新しい形で可能にするかに見える科学技術の驚異的な進歩と、物質文明の発達を至上の価値とする精神であり、それに反発する「恐ろしい母」として、これまたホーソーンが批判的であったのが、ブルックファームを始めとする様々な社会改革、マーガレット・フラー的な女権拡張論、エマソンが代表する超絶主義等のロマンチックな価値観である。原作においては、「恐ろしい父」が「共同体」の硬直した父権的な神権体制と医師チリングワスによって、「恐ろしい母」が「共同体」に疎外されたヘスターの思索の内容と、森でディムズデイルを脱出へと誘う彼女の姿によって表わされていると考えられる。これらの力は、他の作品にも様々な形で描かれ、批判されている。しかしながら、作者が非政治的な作家であったことも手伝って、アメリカの国家的な自我が直結すべき肯定的な父性原理を、彼が何と考えていたかは明確ではない。山本雅氏が『アメリカ社会の批評家としてのホーソーン』において論じているように、ホーソーンは人間社会の進歩をもたらす力をプロビデンスに求める神中心の進歩思想の持ち主である、というのが著者の立場でもある。青山義孝氏が述べるように、ホーソーンの世界は「＜人間の最善の努力もなしうるとどのつまりは夢、神が世界を動かす唯一の存在なり＞という、正統派キリスト教思想を核とする」<sup>2</sup>ものであったと言えるかも知れないが、この点については更に考察を要するので、ここではこれ以上は述べない。

一方、国家的レベルにおける肯定的な女性（母性）原理は、国家的自我をそのような父性原理に直結させる仲介者としての役割を果たすもので、原作から推測する限りにおいては、謙虚に神意を受け止めようとする自己放棄の精神、献身的な母性愛のごとき無私の愛、それに支えられた自発的な慈善活動、男女の幸福が平等に実現するような社会の成熟を待つ穏やかなフェミニズム等であり、ディムズデイルの告白と死の後に、自ら胸に緋文字をつけて悩める人々の良き相談相手となったヘスターの姿によって、主として表わされていると思われる。社会的、あるいは政治的な問題について、国家的自我はこのような一種の待ちの姿勢に徹し、神意にすべてを委ねるべきだ、という立場をホーソーンがとったとすれば、よく問題とされる奴隷制についての彼の態度も、理解できるのではなからうか。彼は、奴隷制度は「プロビデンスが人間の工夫によって解決させないようにしている諸悪の一つである。しかし、プロビデンスは、時がくれば予期し難い方法によって、単純かつ簡単な方法によって、奴隷の効用が全て使い尽くされた時、それを夢のように消してしまうであろう」<sup>3</sup>と述べて、実際には奴隷制度を容認しているので

ある。

このように、作者の分身と思われるディムズデイルに19世紀前半の若きアメリカの国家的な自我を重ね合わせることは、無理があるだろうか。しかし、大橋健三郎氏が述べるように、作者の「歴とした家系」のゆえに「植民地時代および建国以来のアメリカと運命を共にしているという思いが、彼の心の底に重く沈んでいたに違いない」し、意識的にも無意識的にも彼は「アメリカの運命を自分に引き受けた」<sup>4</sup>とも言えるのではないか。そのような「彼の生き方が、当時の歴史的状況を背景にして、のちに彼が生み出すすぐれた短編や長編の構造や本質とパラレルを成し、両者の間に密接な関係があると思われる」<sup>5</sup>とき、アメリカの国家的自我の辿る運命が、作者の分身と思われる人物を通して作品に描かれている、と考えても不自然ではないだろう。

## I

さてこれまで原作の元型的な枠組み、元型的な人物像、元型的なプロットの進展等を含めた作品の世界と、作者の私的な状況、および当時のアメリカの社会的な背景の両方との密接な関係について述べてきた。これは、謂わば拙論の論旨の再確認と補足である。ここで新たに問題になるのは、パールであろう。本稿の目的は、これまでの考察を前提とした上で、その中にいまだ登場していない彼女の役割を論じることである。作品の世界と作者の公私にわたる外界における元型的な布置（これらは、当然ながら、作者の内界の元型的な布置を反映しているわけであるが）に、彼女は如何なる位置を占めているのだろうか。まず、作品における彼女の役割を考えるに先立って、緋文字そのものと作者との関係にたちもどってみたい。というのも、作者が繰り返し述べるように、彼女は「形の違った緋文字」、「生命を帯びた緋文字」<sup>6</sup>、即ち緋文字そのものであるからだ。そして、緋文字と作者の最初の出会いは、作者が作品の執筆に至った経緯を述べた序文である「税関」に、象徴的に描かれている。さびれた税関の二階で、序文の語り手は、過去の遺物である紙屑の山の中から、擦り切れた布でできた緋文字を発見する。奇妙に注意を引き付けられ、彼は「解釈の労をとるに価するようななにか深い意味」、「その神秘的な象徴から流れ出て、わたしの感覚にそれ自身を伝達しながら、わたしの心の分析を忌避するような意味」<sup>7</sup>が隠されていることを直感的に感じ取り、思いを巡らす。チャールズ・ファイデルスン Jr. は、その姿を、作者ホーソーンが「我知らず描いた象徴主義者としての芸術家の肖像」と呼び、「著者の根本主義とは一つの象徴であって、その象徴に本来備わっている意味が『緋文字』となる」<sup>8</sup>と述べている。彼に従えば、象徴としての緋文字の包含する意味が作品『緋文字』のテキストであることになる。そうであれば、生きた緋文字であるパールの意味もテキスト全体の意味と同義であり、逆に言えば、テキストをすべて解釈した時にパールの役割も明らかになるということであろう。このことを、既に論じたように、ディムズデイルを中心として互いに対立する2つの元型が4つに分解し、やがて統合されていくプロセスとしてテキストを解釈する視点から見れば、彼女はこれらの元型の対立から統合までのプロセスのすべてを意味している、ということになる。ファイデルスン Jr. が述べる如く「ホーソーン自身が緋文字を見つめ思いをこらした〈税関〉の場面をあらゆる登場人物が再演して」おり、「彼らは精神的にも肉体的にも緋文字の意味を表わす役割を果たすために生きている」<sup>9</sup>ということになり、ディムズデイルを中心

に4つの元型を体現する「共同体」、ヘスター、チリングワス、という登場人物の演じる対立と統合のプロセスは、すべて謎めいたパールの内包する意味を解釈する方向に収斂する、と言えないであろうか。即ち、彼女こそテキストの発端となる対立から結末となる統合までの生きた象徴なのである。それは、具体的にはどういうことなのか。抽象的な議論はさておき、テキストの中にパール本人を追ってみたい。対立と統合を、キーワードとして。

まずパールは、多くの批評家が指摘するように、罪の象徴であると同時に神の恩寵の証しでもある両義的な存在である。まず、罪の象徴という負の面から見ていきたい。第6章で既に彼女は、「パールはこどもの世界の生まれながらの追放人であった。悪の小鬼、罪の表象、罪の子である彼女は、洗礼を受けた幼子の中にはいる権利がなかった<sup>10</sup>」と説明され、罪の結果として生まれたため「この世界との関連と適応性が欠けていた<sup>11</sup>」し、「混乱した諸要素をもった存在<sup>12</sup>」で、ヘスターの胎内にいた頃の母親の精神の戦いを反映してか、その「狂暴な、絶望的な、反抗的な気分や、気まぐれの気質……暗雲と落胆の雲のような形<sup>13</sup>」を受け継ぎ、衝動的な「妖精<sup>14</sup>」のように捕えどころのない子供として描かれている。また自分と母とを孤独に迫りやる周囲の世界に対する「憎しみ……敵意……激情<sup>15</sup>」はめざましく、現実の子供達の悪意に対してのみならず、自分の想像力で生み出した遊び相手にまで敵意を向ける姿を、作者は「彼女はひとりの友だちも作らないで、いつも竜の歯をまいたようすだった<sup>16</sup>」と述べる。とりわけヘスターにとって耐え難い苦痛の種となったのは、赤ん坊のパールが初めて意識で捉えた対象が、他ならぬ母親の胸の緋文字であり、その後も常にそれを意識し、もてあそぶ癖が強まる一方だったことである。そのような時、ヘスターは娘の目の中に悪魔のような、恐らくはチリングワスの顔が覗いているような気がして苦しむのだった。このような個性の強いパールが「共同体」から「悪魔の落とし子<sup>17</sup>」、「悪魔の申し子<sup>18</sup>」とみなされても無理はないかもしれない。酒本雅之氏は、彼女を「ヘスターの内面を映し出す映像……内なる悪の反映<sup>19</sup>」であると述べ、ロレンスに至っては「ヘスターに宿る悪魔はパールにおいていっそう純粋な悪魔を産み出した<sup>20</sup>」と断言し、パールを「魔性の少女<sup>12</sup>」と呼んでいる。リチャード・チェイスは捕えどころのない彼女の気質を「直感的で無秩序な詩的世界観を代表する」ものでピューリタンの峻厳な教義によって禁圧されている「永遠に生きる民衆の想像力」と受け止めている。<sup>22</sup>ダニエル・ホフマンはそれを「道徳的には無方向の生のエネルギー」で「生命の魔力」であり「前キリスト教的自然の精霊」とみなし、作者が「メリー・マウントの五月柱」に描いた異教的価値を導入していると述べる。<sup>23</sup>

このように野性的なパールが全く逆の神の恩寵の証しと考えられるのはなぜか。それは作者自身の言葉とパールの実際の役割による。第6章にはマタイ伝を連想させる彼女の名前への言及ばかりでなく、「あの小さなこどもの汚れを知らぬ生命は、はかり知れない神の摂理の定めによって、罪の情熱の過度のほとばしりから、美しい不死の花となってもえいでたものであった」し、「神は、人間がこのような罰した罪の直接の結果として、彼女に美しいこどもを与えたもうたのであるが、そのこどもの今いる場所はその名誉を失った同じ胸の上であり、その親を永久に人間の種族と子孫と結び付け、最後には天において祝福された魂とさせるためであった！」<sup>24</sup>と述べて、「幸運な墮落」のイメージを持ち出している。実際、パールの存在のゆえにヘスターは魔女ヒビズ女史の森への誘いを断わり、「こどもは母を悪魔のわなから救った<sup>25</sup>」のであるし、悪意に満ちた「共同体」の子供達を威嚇する様子は「若い世代のものと

ちの罪を罰するという使命を持った……まだ羽毛のはえそろわない審判の天使」にたとえられている。<sup>26</sup> 青山義孝氏はパール<sup>27</sup>の聖性を表わすこのような要素を「過去の世代と何の関係もない、新しい要素から作り出された人間で、自らが自らを律する法とならざるを得ず、いずれから来ていずれに去ってゆくとも知れぬかに見える」特性と結び付け、キリスト的要素と解釈する。そしてホフマンやチェイスとは異なり、野生の森に対するパールの強い親和力をイザヤ書を引用して説明し、パールにとっての自然を千年王国の救われた自然と捉える。氏はそれを、自然のあまもをかき集めて彼女が自分の胸に飾ったAの文字が、みずみずしい緑色であったこととも関連づける。そして彼女が常に光のイメージと結び付けて語られることに言及し、彼女を取り囲む「光の魔法のような輪」<sup>28</sup>がヘスターが来ると消えてしまうことや、彼女が「光の衣をまとった幻」<sup>29</sup>のように見え、森の小川に映った彼女の姿が「黄金色の光に包まれて」<sup>30</sup>いること等から、彼女を光であるキリストと重ね合わせ、「ヘスターを懺悔と回心に到らせる役割こそが緋文字とパールの役割なのである」<sup>31</sup>と結論するのである。彼女をキリストと結び付けるかどうかはさておき、ヘスターを真の懺悔に導く役割に疑問の余地はないであろう。だが同時に、パールに悪魔的にも見える野性の傾向が内在することも、厳然たる事実である。

## II

このようなパールの両義性をどのように理解すればよいのだろうか。青山氏は、原作が性善説的な子供観を持つ19世紀ロマン主義の時代に性悪説的な立場の反ロマン主義者が書いた、17世紀の性悪説に立つピューリタンの物語であることに、この両義性を帰している。それを勘案し、また罪と救いのパラドックスの中に神意の測り難さを見るにせよ、テキストに人類の普遍的な集合無意識の表現としての元型的な布置を読み取った筆者の立場からは、パールについてもキリスト教的な視点とは別の、むしろその視点が成立する以前から存在するものを認識する視点を取り入れたい。既に見たように彼女が生きた緋文字であり、彼女の意味するものがテキストそのものであり、従って登場する諸元型の対立から統合までのプロセスの象徴であるという前提に立てば、当然彼女の中に対立する諸要素がなければおかしいのである。テキストの中の彼女の人物像は、確かにこの前提を裏付けている。では、一人の登場人物である彼女が『緋文字』という特定のテキスト全体を象徴するという時、それはどういう意味か、またどのように実現されているのか、彼女がテキストにおいて実際にどのような役割を果たしているのか等を、論じなければならない。その前に、一般的に象徴とは何か、少し考えてみたい。

河合隼雄氏は、象徴に優れた創造性を見出だしたC. G. ユングの考えを解説する。ユングは、象徴とは「ある比較的未知なものを表現しようとして生じた最良のもの、その他にはこれ以上適切な表現法が考えられないという場合」<sup>33</sup>に生まれる心象であり、「対立するものの統合性をもつことが特徴的」<sup>33</sup>であるという。彼の説によれば、象徴の形成過程は次のように説明される。

象徴が生じる前は、相反する二つの傾向が意識され、その完全な対立を、簡単にどちらかに加担することなく経験することが認められる。……この両者の対立により自我は一方的に行動することができなくなり、一種の停止状態を味わうこととなる。ここで今まで自我機能を働かすのに役立つ

ていた心的エネルギーは、自我から無意識内へと退行を起こす。つまり、心的エネルギーはその源泉へと帰り、無意識の活動が始まる。……このように強い退行現象が起こり、自我はその機能を弱めながらも、それに耐えて働いているとき、無意識内の傾向と自我の働きと、定立と反定立を越えて統合された心像が現われてくることがある。このように統合性が高く、今までの立場を越えて創造的な内容をもつものが象徴であり、このような象徴を通して、今まで無意識へと退行していた心的エネルギーは、進行を開始し、自我は新たなエネルギーを得て再び活動する。<sup>34</sup>

そして、河合氏は、この象徴形成の過程は創造の過程と同じであると述べている。これこそまさに、「税関」の中で語り手が古いぼろ布でできた緋文字と出会った時に彼の心に起こったことであり、現実には作者が、既に見たような相対立する元型的な布置に公私ともども取り囲まれた状況から、象徴としての緋文字を生みだし、原作の着想を得るまでに起こった内面的なプロセスだと思われる。このような象徴形成の過程は、『緋文字』のテキストが対立する諸元型の統合までのプロセスを描いたものであるとする私見を、裏付けているとも言えよう。

さて、パールのテキストにおける実際の役割に戻ろう。上記の象徴形成の過程を踏まえた上で、テキスト全体の中の部分的な象徴としてのパールの中に見られる対立項を、聖性と悪魔性、罪と救い、霊と肉、無垢と墮落、キリスト教的なものと異教的なもの等、様々に呼ぶことは可能である。しかし河合氏も言うように、「その内容が高い統合性と創造性を持ち、他のものでは代用しがたい唯一の表現として生じるときを象徴といえることができる」<sup>35</sup>のであって、決して既知の対立物を二つ組み合わせただけのものが象徴ではないはずだ。しかも既述したように、パールは変化するプロセスとしてのテキスト全体を意味しているうえに、彼女自身、主要な登場人物の内でも唯ひとり成長しつつある幼い子供である。そのあたりに、彼女の謎を解く鍵はないのであろうか。

河合氏は、「新しいものが生じてくるとき、それが元型的な子供の像によってあらわされることは重要な事実」<sup>36</sup>であることをユングが明らかにし、その場合、「新しい可能性の出現」<sup>37</sup>としての意味が強いという。そしてユングが「この心の中に生じて来る＜未知の新しい可能性＞が、内的には神秘的な、われわれの一般の理解を越えるものとして体験されるとき、子供の誕生にまつわる異常な話として表現されることを指摘している」<sup>38</sup>と河合氏は述べ、日本の「桃太郎」や「かぐや姫」を例に挙げている。パールもまた「未知の新しい可能性」であり、神秘的な、一般の理解を越える存在として描かれているし、その父親の分からない私生児という設定は、17世紀のピューリタン「共同体」を背景としたテキストにおいて、十分に異常な出生と言えよう。しかし、これまで論じてきたことから解るように、彼女はテキスト全体の中で単なる「未知の新しい可能性」という部分的な役割に留まるはずはない。彼女は一登場人物でありながら、テキスト全体を象徴しているのだから。

ところでユングは「意識と無意識とを含んだ心の全体性の中心」であると考えられる「自己」の人格化された像として、「老賢者」や「至高の女神」の他に「子供」の像を挙げている。<sup>39</sup>これは「自己実現の過程として現在生成されつつある面が強調されているもの」<sup>40</sup>だという。「自己」の概念はユングの心理学の核心をなすもので、自我が安定した状態にとどまることなく、「その安定性を崩してさえ、より高次の統合性へと志向する」<sup>41</sup>その働きの中心を、彼は「自己」と呼ぶのである。「自己」は「意識と無

意識の統合の機能の中心であり、そのほか、人間の心に存在する対立的な要素、男性的なものと、女性的なもの、思考と感情などを統合する中心とも考えられる<sup>42</sup>と河合氏は言う。この「全人格の中心」たる「自己」に導かれて「個人に内在する可能性を実現し、その自我を高次の全体性へと志向せしめる努力の過程を、ユングは個性化の過程（individuation process）、あるいは自己実現（self-realization）の過程と呼び、人生の究極の目的と考えた<sup>43</sup>」のである。『緋文字』が、集合無意識の内容である対立する諸元型の統合へのプロセスという形で「息子＝自我」ディムズデイルの独立への戦いを描いたものならば、そのテキストは、独立を目指す段階の「自我」を含む意識と無意識を合わせた人間の心の全体性の活動を表わしていると言えないだろうか。そして、パールがテキスト全体の意味を体現しているのならば、彼女こそ心の全体性の活動の中心たる「自己」元型の象徴と言えないだろうか。そう解釈することによって、テキストの一部でありながら全体を意味するという彼女の役割が可能となるのである。

### III

そうであれば、彼女が「人間の心に存在する対立的な要素……を統合する中心」として、善と悪、罪と救い、罰と恩寵、聖性と悪魔性等の対立を融合させた人物であることもうなずける。また「自己」は「自我を高次の全体性へと志向せしめる」働きをするのであるから、彼女は「自我」ディムズデイルを先導し、対立する元型のな力をより高次の統合へと志向せしめ、ついには独立に至るまでの道程を最後まで歩みさらせる役割を果たしているはずである。原作をみていきたい。彼女が父親と顔を合わせる場合はそう多くはないが、中でも第8章は彼女が彼に純粋な優しさを示す数少ない場面である。ヘスターが、唯一の宝であるパールを「共同体」の指導者達に取り上げられるのではないかとの危惧の念から——それは大いに確かな根拠のあることであったのだが——自らベリンガム知事の邸宅に出向き、娘を手元で養育したいと訴え、居合わせたディムズデイルが弁護することによってその願いが聞き届けられた際、パールは彼に驚くほどの好意を示す。

あの野生的な気紛れな小妖精のようなパールはそっと彼のほうへしのびよると、彼の手を自分の両手にしっかりとつかみ、それに自分のほおを押し当てた。それがあまりにもやさしい、また慎み深い愛撫だったので、その様子をながめていた母親は、「あれがわたしのパールかしら？」とみずからたずねたほどであった。<sup>44</sup>

ヘスターの母性愛から発した血を吐くような訴えへの弁護に対して、この世に母親しか頼るすべのないパールのような娘が幼いなりに共鳴し、感謝するのは、彼女とディムズデイルの隠された絆を差し引いて考えても不思議ではない。しかし、ここでは彼の弁護の内容にも注目しなければならない。彼は、ヘスターが求めたような同情心から、あるいは母親の権利の擁護を目的として彼女を弁護したのではない。彼は、パールがヘスターに対する神による「罪の報い」であると同時に「祝福」でもあると述べ、彼女の存在に「神の行ないたもうたおごそかな奇跡<sup>45</sup>」を認め、それゆえに母と娘を引き離すべきではないと主張するのであった。

このきのどくな罪深い女が、永遠の喜びも悲しみも味わうことのできる幼い不滅の魂を任せられて、世話をし——正義の道へと教育し——いつなんどきも自分の墮落を思い浮かべさせられ——だが、あたかも造物主の神聖な誓約によってのように、もしも自分がこどもを天国へつれていけば、こどももまた母親をそこへつれていくであろうということを教えられるというのは、彼女にとってよいことなのです！……<sup>46</sup>

青山氏も指摘しているように、ここには「幸運な墮落」の考えが表われている。即ちディムズデイルは、「共同体」から罪の表象としか見られていないヘスターの中に母性愛という救済をもたらす芽を見出だし、「原母」としての彼女から明らかな肯定面を引き出している。言い換えれば、その面を無視していた「原父」としての「共同体」の否定面を指摘したことにもなる。しかも、この母性愛は本来「太母」元型の基盤である大地に根差す豊かな産出力であり、それを神の救済と結び付けることは、父元型と母元型の肯定面を統合しようとする一つの試みと言えよう。パールがこのような主張に母親も驚くほどの好意を示す時、彼女が父親をはじめとする周囲の世界に対して、自分と母親との関係や自分の存在意義、更には母親の救済の可能性等について指し示す方向性は明らかである。と同時に彼女は、「父」と「母」という二つの元型的な力を統合しようとする方向に精一杯の賛意を示していると考えられる。

ではディムズデイル自身の状況については、彼女はいかなる態度を示したであろうか。第12章で彼がヘスター、パールと共に真夜中に処刑台に上がって罪の告白の真似をした場面では、昼間に自分と母の手を引いて同じ場所に立ってくれるかと何度も尋ね、拒絶されると彼が正直でないとなじる。更に、少し離れた場所に立っていたチリングワスを指さして、彼の正体についてもディムズデイルの注意を強く喚起する。まさにその時、医師は秘めていた悪意を明瞭に表情に表わしていたため、牧師は彼への嫌悪感と恐怖感を初めて強烈に自覚するのである。即ち彼女は、昼間に自分達三人で処刑台に立つよう求めることによって、ディムズデイルの告白の真似がいかに欺瞞的な行為であるか、彼の取るべき真の道は何か、自分達三人の絆はどうあるべきかを伝え、従順な後継者という欺瞞的なペルソナを彼に押しつけようとする「恐ろしい精神父」としての「共同体」の否定面を克服するよう、彼に求めるのだ。同時に、そのために対決して戦わねばならない当面の敵が、「恐ろしい精神父」から派遣された「竜」としてのチリングワスであることを、彼女ははっきりと伝えているのだ。第19章では、ヘスターと共に「共同体」を脱出する決意をしたディムズデイルから額にキスされた彼女が、それをすぐさま小川の水で洗い流してしまう。これが、彼らの脱出とそのような形での三人の絆の修復の欺瞞性を示しているのは明らかであるが、この行為に彼が気づいたか否かに作者は触れていない。しかし、その時点までに、母親と牧師から小川を隔てて立ち止まったまま動こうとせず、側に来るようにという母親の哀願にも脅しにも屈せず、しかめ面をして母親の緋文字をはずした胸を指さし、ついには激しい癪癢をおこす彼女の姿がある。牧師はこの激情に恐れをなし、母親はそれに促されるように再び緋文字を胸につけ、いったんは見せた豊かな黒髪も再び地味な帽子の中に隠して、輝くような女性美を消してしまうのだ。パールは、緋文字を捨てて女性美を誇示するヘスターに「息子＝自我」を誘惑する「太母」の否定面を見出だして激しく糾弾する。また、作者はそのような否定面のイメージを、過去を帳消しにすること、即ちエマソンの主張する超絶主義敵な生き方と重ね合わせて描くのだが、パールは同時にそれも拒絶してい



ることになる。この一連の大騒ぎは当然ながらディムズデイルの胸に食い込んだはずであるから、娘の露骨な敵意は、次章に描かれる彼の悪魔的な変貌が彼の全存在を覆い尽くすのを辛うじてくいとめる役割を果たしたのではなからうか。彼は森から帰宅する途中、様々な悪への衝動に襲われながらも踏みとどまり、自分が悪魔と契約を交わしたのかと自省する余地を残しているからである。その余地が次なるチリングワスとの再会における「竜退治」を可能にしたのであるから、パールは父親を救済に導いていったと言えよう。

以上の考察によって、彼女が「自我＝ディムズデイル」を導いてより高次の段階、つまり独立へと前進させる「自己」の役割を果たしていることは明らかであろう。最後に告白を実行してヘスターの腕の中で死んでゆく彼の姿は、ピエタのキリスト像を連想させるが、キリストはまた冒頭の処刑台の場面で、聖母を連想させるヘスターの腕に抱かれていたパールのイメージでもあった。ディムズデイルは最初に彼女によって提示された位置に最後に到達したわけで、対立する四つの元型的な力を統合して独立した「自我」を象徴するのが、ピエタのキリスト像である。聖なる幼子としてのパールは、未熟な「自我＝ディムズデイル」をその最終段階へと導いていくために、彼の進むべき道をあらかじめ示す「自己」の一つの姿と言えるのではなからうか。ここで注意したいのは、キリストのイメージを身に纏うとはいえ、パールの象徴する「自己」が、決して「共同体」の神への認識とは一致していないことである。彼女は「共同体」の子供達の悪意に対しては激しい敵意で応じ、彼らを追い散らすさまは、「まだ羽毛のはえそろわない審判の天使」<sup>47</sup>にたとえられている。また、彼女は「共同体」の墓地で跳んだりはねたりし、その様子は「あたかも彼女が新しい要素から新しく造られたもののようで、どうしても彼女自身の勝手な生活を送ることが許されなければならないし、その特異な行動も彼女にとって犯罪とは考えられずに、彼女がみずからの法律とならなければならないかのようであった。」<sup>48</sup>青山氏は、これをむしろキリスト的な特質を示す箇所としてとりあげている。彼女の表わすキリスト的な要素は、「共同体」の奉じるそれとは相容れない。それゆえ、自分の造り主が誰であるかをウイilson牧師に聞かれて、「自分は造られたのではなくて、母が監獄の大戸のそばにはえている野ばらの茂みからむしり取ったのだ」<sup>49</sup>と答えるのだ。「自己＝パール」は、「自我＝ディムズデイル」が「原父」たる「共同体」から分離させ、意識に同化する肯定面とのみ結びついているのであるから。この点については、後で再度触れることにする。

ところで拙論「ヘスターとプシケー」<sup>50</sup>において、『緋文字』がディムズデイルばかりでなくヘスターの女性としての自我発達の元型的プロセスとして読むことも可能であり、それがプシケーの神話と酷似していることを論じた。確かにディムズデイルとヘスターの発達過程は、互いに不可分の状態を保ちながら進展し、一方が他方を変容させる相互依存の関係にある。「自我＝ディムズデイル」を中心とする心の元型的布置において、彼女は最終的に「原母」から肯定的なアニマとして分離し、意識に統合されていくことは上記の拙論で論じたが、ここでいったん彼女の自我発達に焦点を合わせると、パールの役割はどのようなものであろうか。父親の死に際して涙した時、母親に対する「苦しみの使者」<sup>51</sup>としての彼女の使命が終わった、と作者は言う。胸の緋文字と同様に片時もヘスターの側を離れない「苦しみの使者」とは、何を意味するのか。何度も繰り返し描かれているように、「この緋文字はどういう意味なの？——そしてなぜ胸にそれをつけているの？——それにあの牧師さんはなぜいつも胸に手を当てていらっしゃるの？」<sup>52</sup>という彼女の問いが、緋文字を遊ぶ癖と共に常に母親を悩ませ続けた。二人きりでの

生活の中でこの問いに晒され続けなければならないのであるから、ヘスターの言うように娘は彼女の「幸福」であると同時に「責め苦」でもある<sup>53</sup>。しかし彼女はディムズデイルの主張した「幸運な墮落」説を率直に信じる気にはなれない。テキストの初期には、「共同体」の冷酷さや独善性に強く反発しながらもその規範には従順であった彼女は、悪から善が生まれるとはとても信じられなかったからであるが、換言すれば自らの豊かな情念を否定するあまり、その中に天なる神という肯定的な父性原理に統合し得る要素を認めることができなかったのである。にもかかわらず、実際にはパールへの母性愛は、「太母」の否定面である魔女ヒピンズ女史の誘いを拒否させ、知力を偏重する否定的な父性原理に基づくアン・ハッチンソン流の思索からもヘスターを遠ざけた。後者は謂わばチリングワスの知力の支配する「恐ろしい地父」の世界に通じる道とも考えられる。愛する我が子の無邪気な問いの繰り返しが常に彼女の罪悪感を刺激したとすれば、彼女が逸脱を避けるのに、それが少なからず貢献したと言えないだろうか。やがて、「緋文字の謎の周りをさまよおうとするパールの避け難い傾向」が「正義と応報」の神意に添ったものとのみ考えていたヘスターも、それに「慈悲と恩恵」の目的を結び付けて考えられるまでに、つまり「幸運な墮落」説の可能性を感じるまでになってゆく。そして、既にディムズデイルに関して見たように、再度彼女が森で自らの否定的な「太母」性を表わすと、パールは直ちに激しい抵抗を示すのだ。彼女のもう一つの質問——牧師が胸に置いた手に関する質問は、ディムズデイルの空虚な罪悪感と自分との秘密の絆を感知して、ヘスターにそれを実体のあるものにしてくれるように、即ち彼が秘密の罪を告白して自分の父として名乗り出るよう働きかけてくれるようにという訴えに違いない。それは父親を求める叫びであると同時に、母親に向かって、自分に対する母性愛ばかりでなく、彼に対するアニマとしての真の愛を発揮することを求める訴え——ヘスターの内なる「原母」元型から肯定的なアニマ像を分離し、彼女自身の意識に統合するよにという要求——にもなるのではなからうか。なぜなら、彼に対するアニマとしての働きかけこそが、彼を「恐ろしい父」たる「共同体」とチリングワスの手から救い出せるのであるから。そしてヘスターは、まずはチリングワスの正体をディムズデイルに伝えることによって真の愛を貫き、彼の告白への道を開いたのである。こうして母親に常に苦悩をもたらしつつ、その苦悩を通して進むべき道を示し続けたパールは、「自我＝ヘスター」にとってもまた「自己」の役割を果たしていると言えよう。

ところで、ユングの「自己」の概念を説明した際に触れたように、子供としての「自己」像は「自己実現の過程として現在生成されつつある面が強調されているもの」である。が、それゆえ「無限の発展の可能性を示すとともに、半面、一見するところ弱いものとか、あまり価値のないもののような感じを与え」、「なかにはこんな子供の言うことを聞く必要があろうかと打ちすててしまう人もあろう」と河合氏は述べる。そのような人は、「自己」の示す可能性を実現する機会を逃しているわけである。ディムズデイル自身、パールの存在の中に「幸運な墮落」を示唆する神の摂理を認めながら、彼女自身の言動にはほとんど注意を払わない。第10章で彼女の奔放な行動を見て、彼女が何かはっきりした人生の方針を持っているのだろうかとかチリングワスに聞かれ、彼は「持っていませんよ——破戒の自由のほかはね<sup>56</sup>」と答える。第12章でも、真夜中の処刑台でパールがチリングワスの方を指差し、彼の正体を教えると言って牧師の耳に何かささやいたが、彼は理解できずに「私をからかうのかね？」<sup>57</sup>と言う。そして、医師への恐怖感と嫌悪感を初めて自覚したものの、「先生は大胆ではないのね！——正直ではなかったのね！……

明日のお昼に、あたしの手とおかあさんの手を取ってくれると約束してはくれないんですもの！」<sup>58</sup>というパールの答えを、その時点では真剣に受けとめようとはしない。しかし、第19章では、小川の向こうから動こうとせずにじっと自分とヘスターをみつめている彼女の視線を感じると、思わず手を胸に置いてしまうが、それは秘められた罪悪感を示す彼の癖である。この反応は、それに続く彼女の癪癢や彼のキスを洗い流すという彼女の行為に、彼がかなりの衝撃を受けたであろうと推測させる。7年の時の流れは、徐々にではあるがディムズデイルに「自己」を受け止めさせるようになったと言えよう。ヘスターもまた、次第に「幸運な墮落」説に傾いていったとはいえ、既に述べたパールの二つの質問を真面目に受け止める気にはなれず、「牧師さんの胸のことなんか知るわけがないでしょう！ 緋文字はね、金糸があまり美しいので、つけているのよ！」<sup>59</sup>と答えるだけである。そして牧師の胸に手を置く癖について、「牧師さんが本に自分の名前をお書きになったとき、悪魔がああ場所に印をつけたからなのね？ でもなぜあのかたは、お母さんのように、胸の外にそれをおつけにならないのかしら？」<sup>60</sup>という娘の質問を無視するのだ。「自我＝ヘスター」が「自己＝パール」の志向するものを完全に意識面に同化できるのは、ヨーロッパに渡ったパールと別れて一人で帰国し、再び自発的に緋文字を胸につけた時であろう。

#### IV

更に、「自己」たるパールは自らをどのように表現しているであろうか。第15章に水たまりに映る自分の姿と戯れる場面があるが、彼女は「さわっても分からない大地と手のとどきそうもない大空の映る世界」<sup>61</sup>へ自分からはいってこうとする。ホーソーンは、実物より鏡に映った映像のほうに真実を語らせるという手法を好んで用いたが、ここで水たまりを鏡の一種と考えれば、彼女の世界は精神（大空）と肉体（大地）、あるいは天なる父神と地たる「太母」、父性（男性）原理と母性（女性）原理、文明と野生等の対立項が統合された世界と言えよう。更に彼女は、さわやかな緑色の海藻で作ったAという文字を胸につけて遊ぶ。これは、ヘスターの緋文字と対照させられているが、これは青山氏の指摘するように母親と娘のそれぞれにとっての自然を象徴するばかりでなく、二人の内なる自然——女性としての本質——を意味していると言えないだろうか。この時点でのヘスターの場合は罪に通じる過度の情念、即ち「太母」の否定面を含み、パールの場合は「太母」の肯定面のみである。色は異なっても、共に女性である二人の胸につけられた同じAである以上、「太母」性を含むことは共通しているのではなからうか。彼女と自然との関わりという点では、荒々しい狼の頭をなでてやったと噂されるほど、野生の森との親和力を持った彼女であるが、青山氏はその光景を聖書の救済された千年王国の自然と結び付けて、彼女のキリスト的なイメージを指摘する。しかしここでの彼女は、緑色のAに象徴されるのと同様な存在であって、父権的なキリスト像というより、母権的な太古の森と親密に共鳴しあうほどの強烈な野生——原始的な「太母」性——を受け継ぎながらも、それに平和な秩序を与えて調和ある世界を生み出す存在、即ち父性（男性）原理と母性（女性）原理を肯定的に統合する存在と位置づけた方がよいのではなからうか。それは、森でディムズデイルとヘスターの誘いを拒絶し、小川の側に立って激情の発作を起こす彼女の姿にも言えよう。この場面で彼女は野生の花や小枝で身を飾り、妖精のこどものような姿で岸辺に立ち、日光を浴びたその姿は水面に映っていた。水鏡に映った彼女は、黄金色の日光を浴びて

輝いていたが、青山氏はその様子を光をまとったキリストのイメージに重ねて解釈している。しかしここでもまた、母なる森の妖精のようなイメージと父なるキリストのイメージが融合し、母性（女性）原理と父性（男性）原理が肯定的に統合されていることに注目したい。「自我＝ディムズデイル」との関わりについて考察した際に、「自己＝パール」の体現するキリスト的な要素が「共同体」の奉じる神の概念とは異なっていると述べたが、それは彼女がこのように「共同体」の象徴する「原父」元型の中から肯定面を抽出し、それと「原母」元型の肯定面を統合しようとする新たな存在であるからなのだ。チェイスはパールを「直感的で無秩序な詩的世界観を代表し」、「永遠に生きる民衆の想像力」であって「ピューリタンの教義によって禁圧されている要素」とみなしながら、「皮肉なことに、他のすべての者と共謀して豊かなヘスターを清教徒的民主主義にふさわしい姿に改変しようとする」<sup>62</sup>存在と考えている。しかし、彼女の志向するものは決して「共同体」と一致するものではない。この肯定的な父性（男性）原理と母性（女性）原理との統合への姿勢は、既に見たように「幸運な墮落」説にも含まれる。したがって「自我＝ディムズデイル」に告白を実行させ、「自我＝ヘスター」に彼の告白の介添えをさせた後、自発的に緋文字を身に付けて悩める人々の良き相談相手となるという形での最終的な独立に彼女を導いていく「自己＝パール」の志向するのは、この二つの対立原理の肯定的な統合であると言えよう。それはまた、原作のテキストを、対立する「原両親」の元型的な支配力の分解から統合へのプロセスと解した私見と一致するのである。

河合氏は、「自己」のこのような統合性が強調される場合、「反対物の合一を示す男性と女性の結合の姿」<sup>63</sup>が「自己」像として生じることがあり、西洋のおとぎ話で王子と王女の結婚がテーマとなることが多いことに反映されていると述べる。また一例として拙論でも取り上げたエロースとプシケーの神話を引用し、女性的な「自我」たる彼女が彼の象徴する内なるアニムスを幾多の試練の後に意識面に統合し、この「自己実現」が二人の結婚に象徴されていることに言及する。そのような意味で、パールは単なる神秘的な子供ではなく、ディムズデイルとヘスターの子供として、冒頭から二人の内的要素の統合の可能性を秘めていることは明らかだ。第19章にそれを再確認する箇所がある。

そしてパールは二人の生命の結晶であった。過去の悪がどのようなものであれ、彼ら二人が出会い、ともに永遠に住んでいくべきこの肉体の結合であると同時に精神的理念でもあるこのこどもを見たとき、彼ら二人の地上の生活と未来の運命とが離れがたく結ばれているという事実をどうして疑うことができるだろうか？<sup>64</sup>

そのような意味では、パールは二人の「結婚」を視覚的に象徴する存在だと言えるが、重要なことは、その「結婚」が二人のどのような内的要素の統合を意味するかであろう。パールが二人の可能性を実現し、「その自我を高次の全体性へと志向せしめる」時、初めて彼女が二人の「自己」であると言えるのだ。これまで論じてきたように、彼女の志向する方向は確かにテキストの結末に合致し、原作を読む限りにおいて、その結末は華やかではなくともディムズデイルとヘスターを、そして作者ホーソーンをも心の深いレベルで満足させているように思われる。したがって、パールは、テキストの元型的な布置が示す心の全体性の中心たる「自己」であると言えるであろう。

## V

作者をも満足させているのではないかという推測は、『緋文字』が彼に作家としての成功をもたらし、彼の最高傑作として今に至るまで彼にアメリカを代表する作家の一人としての地位を確保させているという事実にもよるが、当時の彼の自画像を描いたものと思われる「税関」に、ついに真の作家として立ちとうとする決然たる意志と、自分の可能性を最大限に生かし得る道に没頭することの幸福感がにじみ出ているからである。その「税関」の中で、ピューリタンの祖先の罪に触れた後、次のような目立たない記述がある。「しかしながら、疑いもなく、この厳しい、額を曇らせた清教徒達のどちらも、長い年月の経過の後に、家族の老木の幹がおごそかな苔をいっぱいにつけて、その天辺の枝としてわたしのようになまけ者を持つようになったことを、自分の罪のじゅうぶんな報いとして考えたであろう。」<sup>65</sup>これは由緒ある家系を誇る一族の末裔としての、いささかのユーモアを含んだ自嘲とも謙遜ともとれるが、「老木」と「天辺の枝」の対照が作者による古い血統の再生のイメージを呼び起こすばかりでなく、ユングの説を紹介する河合氏の話の中の「新しい可能性の出現」を象徴する「子供の元型」をも連想させる。木は成長を示すものとしてよく出てくるが、「その成長における新しいものの誕生を、最も端的に物語るものとして、木に生まれた子供とか、木に捨てられていた赤ちゃんの話は、世界中に非常に多い。何か新しいもの、あるいは、価値の高い不思議なものをもたらす子供が、木の上に現れてくる」<sup>66</sup>というのである。「天辺の枝」は、当然ながら若く、木の最も上に位置している。しかも、それは一族の内でも最も若い「子供」(子孫)としての作者自身を意味している。木の上に現われた「新しい可能性の出現」を象徴する子供という作者自身のイメージは、「自己」元型としてのパールの姿に重なってくると言えないだろうか。繰り返し述べたように、『緋文字』は、象徴としての緋文字を媒介として作者の内界をテキスト化したものとも言える。作者の心の元型的な布置を描いたそのテキストの中で、「自己」としての役割を果たしているパールのイメージが、テキストの生みの親たる作者と重なってくるのも、当然と言えば当然であろう。しかしながら、無意識の世界に潜む「自己」は、意識の世界の中心たる「自我」にはほとんど把握され得ない。したがって、作者も意識的には自らを「自我＝ディムズデイル」と同一視していることが、彼の公私にわたる元型的な布置とテキストとの相関関係から読み取れる。上記の「税関」の記述は、彼の「自己」像の無意識的な表出でもあろうか。

## &lt;注&gt;

- (1) 拙論「英雄神話『緋文字』の意味」——執筆の私的要因と社会的要因——(鹿児島女子短期大学「紀要」第31号, 1996)
- (2) 山本 雅, 『アメリカ社会の批評家としてのホーソン』, (溪水社, 1996), p.145.
- (3) Ibid., p.2.
- (4) 大橋健三郎, 『古典アメリカ文学を語る』, (南雲堂, 1993), p.60.
- (5) Ibid., p.62.
- (6) ホーソン, 刈田元司訳『緋文字』, (旺文社, 1967), p.124.
- (7) Ibid., p.42.

- (8) チャールズ・ファイデルスン Jr., 『象徴主義とアメリカ文学』 山岸康司他訳, (旺文社, 1991), p.18-9.
- (9) Ibid., p.20-3.
- (10) ホーソン, op. cit., p.113.
- (11) Ibid., p.109.
- (12) Loc. cit.
- (13) Ibid., p.110.
- (14) Ibid., p.111.
- (15) Ibid., p.114.
- (16) Ibid., p.116.
- (17) Ibid., p.121.
- (18) Ibid., p.309.
- (19) 酒本雅之, 『アメリカ文学をどう読み解くか』 (中教出版, 1978), p.218.
- (20) D・H・ロレンス, 酒本雅之訳: 「ナサニエル・ホーソーンと『緋文字』」 (『アメリカ古典文学研究』 12), 研究社, 1974
- (21) Ibid.,
- (22) リチャード・チェイス, 『アメリカ小説とその伝統』 (北星堂書店, 1970), p.112
- (23) ダニエル・ホフマン, 『アメリカ文学の形式とロマンス』 (研究社, 1983), p.184-5.
- (24) ホーソン, op. cit., p.108.
- (25) Ibid., p.144.
- (26) Ibid., p.124.
- (27) Ibid., p.153.
- (28) 青山義孝, 「パールと緋文字」 (『子どものイメージ——十九世紀英米文学に見られる子どもたち——』, 英宝社, 1992所収), p.158.
- (29) Loc. cit.
- (30) Loc. cit.
- (31) Ibid., p.159.
- (32) 河合隼雄, 『ユング心理学入門』, (培風館, 1990), p.121,
- (33) Ibid., p.129.
- (34) Ibid., p.130-1.
- (35) Ibid., p.132.
- (36) Ibid., p.126.
- (37) Loc. cit.
- (38) Ibid., p.126-7.
- (39) Ibid., p.221.
- (40) Ibid., p.229.
- (41) Ibid., p.220.
- (42) Ibid., p.221.
- (43) Ibid., p.220.
- (44) ホーソン, op. cit., p.141.
- (45) Ibid., p.139.
- (46) Ibid., p.140.

- (47) Ibid., p.124.
- (48) Ibid., p.165.
- (49) Ibid., p.136.
- (50) 拙論「ヘスターとブシケー——『緋文字』に潜む女性的心理発展のプロセス——」(鹿児島女子短期大学「紀要」第29号, 1994)
- (51) ホーソン, op. cit., p.324.
- (52) Ibid., p.222.
- (53) Ibid., p.137.
- (54) Ibid., p.224.
- (55) 河合隼雄, op. cit., p.230.
- (56) ホーソン, op. cit., p.164.
- (57) Ibid., p.193.
- (58) Loc. cit.
- (59) Ibid., p.225.
- (60) Ibid., p.234.
- (61) Ibid., p.220.
- (62) チェイス, op. cit., p.112-3.
- (63) 河合隼雄, op. cit., p.231.
- (64) ホーソン, op. cit., p.260.
- (65) Ibid., p.15.
- (66) 河合隼雄, op. cit., p.126.